

## 訳者あとがき

高分子学会高分子命名法委員会は、1973年以来、高分子の命名法と術語の定義についてのIUPACの勧告を国内へ紹介することを本務とし、それらの文書のうち重要と思われるものについては日本語訳（全訳または抄訳）を作成してきた。さて、2年前、これまでのIUPAC勧告をまとめた“Compendium of Macromolecular Nomenclature”〔The Purple Book, Blackwell Scientific Publications, Oxford (1991)〕がIUPACから出版されたので、本委員会では、早速その翻訳を行うことになった。各章の翻訳を担当した委員は下記の通りである。

序 文	角岡正弘
第 1 章	鶴田禎二, 三田 達
第 2 章	畑田耕一
第 3 章	寺町信哉, 中村茂夫, 野瀬卓平
第 4 章	安藤 勲, 寺町信哉, 中村茂夫, 野瀬卓平
第 5 章	鶴田禎二, 三田 達
第 6 章	堀江一之, 増田俊夫
第 7 章	鶴田禎二, 三田 達
第 8 章	寺町信哉
第 9 章	奥田謙介
付 録	奥田謙介
全章校閲	畑田耕一, 寺町信哉, 増田俊夫, 宮田清蔵

各担当委員が作成した第1次稿に、他の委員が手を加え、さらに、全委員の出席する委員会での検討を数回行ったのちででき上がったのが本書である。すでに全訳（第1章、第5章および第7章）または抄訳（第2章および第8章）が高分子学会発行の月刊誌「高分子」に掲載されていた章についても、今回あらためて詳細な見直しを行うとともに、他の章との術語、用語などの統一・整合化をはかった。訳出は出来るだけ原文に近い直訳方式とし、原文の直訳のみでは読者に理解し難いと思われる部分には訳者注を加えた。また、原文中に散見される誤りには訳者注を施して修正したものを和訳した。

術語の訳出に当たっては、すでに日本語訳の決定しているものはそれに従い、また、可能な限りあいまいさを避けるよう努力した。原理的には、macromoleculeはポリマー分子、polymer(ポリマーまたは重合体)は物質であり、両者は異なる概念をもっている。「ポリマーに関する術語の基本的定義」にも、ある特定のポリマーが「…分子からなる物質」という表現により諸所で定義されている。“高分子”は本来ポリマー分子を意味しているが、混乱あるいは誤解をひき起こすおそれのない場合には、高分子とポリマーとを厳密に区別しないで用いることもしばしばある。本書で“polymer”ならびに“macromolecule”の訳出が一義的でない場合があるのは、このような理由によるものである。

以上のように、本書は高分子学会高分子命名法委員会委員全員の努力の所産であり、完璧を期したつもりであるが、予期しないところに不備な点がないかとの不安の念を禁じ得ない。今後、読者

諸賢の御意見を御得て、より完全なものにしてゆきたいと考えている。御協力をお願いする次第である。

終わりに、委員会で作成した原稿を校閲して頂いた大阪大学理学部 田代孝二講師(第2章, 第4章)および則末尚志助教授(第3章), 群馬大学工学部 甲本忠史教授(第4章), ならびに岡崎国立共同研究機構分子科学研究所 中村晃教授(第6章)に深く感謝の意を表したい。

また、本書作成の過程で、全原稿に目を通し、多くの有益な意見、示唆を与えて頂いたマグロウヒル出版(株)の三輪直美氏, ならびに、委員会の運営事務などに関してお世話になった高分子学会事務局石田王佐編集課長に深く感謝する。

1993年8月10日

高分子学会高分子命名法委員会<sup>†</sup>

委員長 畑田耕一(大阪大学基礎工学部)

委員 安藤 勲(東京工業大学工学部)

奥田謙介(奥田技研)

角岡正弘(大阪府立大学工学部)

寺町信哉(工学院大学工学部)

中村茂夫(神奈川大学工学部)

野瀬卓平(東京工業大学工学部)

堀江一之(東京大学工学部)

増田俊夫(京都大学工学部)

宮田清蔵(東京農工大学工学部)

顧問 鶴田禎二(東京理科大学工学部)

三田 達(ダウ コーニング アジア(株))

† 高分子学会では、1963年学術用語委員会を設置し、高分子科学に関する学術用語の指定・推薦を行うとともに、1968年その下部組織として高分子用語辞典編集委員会を発足させ、「高分子辞典」を発行した。その後、1970年10月学術用語委員会委員の村上謙吉、山田瑛両氏の提案に応じて命名委員会(委員長 祖父江寛、幹事 村上謙吉、山田瑛)を発足させ、その小委員会として学術用語委員会(委員長 祖父江寛、幹事 村上謙吉)、高分子用語委員会(委員長 岡村誠三、幹事 井上祥平)ならびにSUN委員会(委員長 鶴田禎二、幹事 山田瑛)を置いて活動を開始した。これら3つの小委員会のうちSUN(Symbols, Units and Nomenclature)委員会では高分子の命名法と術語の定義についてのIUPACの勧告の検討と国内への紹介を本務とし、1973年12月以来、IUPAC高分子命名法委員会における作業の進展に対応してきた。この間、委員長は1980年に鶴田禎二から三田達に、また、1990年に畑田耕一に引継がれ現在に至っている。たまたま、高分子学会では、上記小委員会のこれまでの活動状況などを考慮して、命名委員会の組織を整理統合するのが学会のため、より効果的であるとの判断により、これをあらためて「高分子命名法委員会」として発足させることになった。今回の翻訳作業はSUN委員会で行ったものであるが、高分子学会高分子命名法委員会訳として本書が出版されることになったのは、このような事情によるものである。